
ぽよぽよ日和

蒼風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼよぼよ日和

【Nコード】

N4654Y

【作者名】

蒼風

【あらすじ】

ちよつと抜けてるところがある僕と、猫かぶりの少女のほのぼのとした毎日。

ドラマティックでも、ミステリアスでも、バイオレンスでもない、ただのありふれたきらきらの日々を。

基本、一話完結の短編集になる予定です。予定は未定ですがw

少年はかく語りき

ふわふわとした温もりが、空から降ってくる。

縁側には風。

耳を撫でる風鈴の音。

秋が近づく季節の中、僕は久し振りの休日を謳歌していた。

「ああ・・・まったりだ・・・まったりだよ・・・」

惰眠をむさぼるつてのが、こんなに心地いい物だなんて、思ってもみなかった高校一年生の初秋。

暦は九月の半ばを過ぎる頃。

普段ならいくら忙しかったとしても、ここまで暇な時間に感動を覚えることなんてない。

ないよね、普通の高校生なら??

で、どうして僕がこんなにへばっているかという・・・。

「こらっ、私の許可もなくなにやってるのよ!」

タッタッタッタとリズムの良い足音で駆け寄る少女が、耳に気持ちの良い声に不機嫌さを滲ませて僕を怒鳴った。

その声を見視し、僕は横になったまま全力で少女から遠のく。

ごろごろと、ごろごろと転がって、なんとか間合いをとろうとするけど、彼女の方が早い。

転がり続ける僕の背中を、庭からサンダルを脱ぎ捨て、家の中に駆け込んできた少女が素足で踏みつづす。

ぐえっつとカエルがつぶれたような声を出して止まる僕の背中に、彼女は勢いをつけて飛び乗った。

マウントポジション・・・じゃなく、フライングボディアタック。つまり、その、彼女の自己主張する柔らかい膨らみが、背中に当

たつてたりするといつかなんといつか・・・。

思わず赤面した僕を苦しんでいるのと勘違いしたのだろう、心配そうに・・・なんてことはまったくなく、にやりと笑った。

まるで、悪魔「子悪魔!!」のように。

正直、地の文にまでつつこみをいれるなんて、ほんとに人間じゃないと思ったりもするけど、それをいうと明日の朝日が拝めないような気がするので沈黙。

「・・・なんかいった？」

「いえ、なんでもありません・・・よ？」

「疑問系なのがすごく気になるんだけど？」

彼女はにこりと笑う。それは本当にかわいらしくて、愛らしくて、だからこそ僕の背筋には寒気が走るんだ。

僕を恐怖のどん底にたたき落としている少女の名は、天城 薫子。僕の通う聖・ザ・ビエール高校の二年生で、二年生であるのに生徒会長を務めるという才女だ。

品行方正・スポーツ万能・頭脳明晰の三冠を達成するという、ある意味漫画のヒロインのような存在だけど、そんな無敵超人な彼女の隠れ性癖を知る人は数少ない・・・ってか、僕しか知らないんじゃないだろうか？

彼女の性癖。

それは、極度のSだということだ。

でも、それは、僕だけに対するもので。

ちよつとだけそれに優越感を感じてる僕は、ちよつと変態か・・・って、ほつといってくれ。

誰につつこんでいるのかも、もうよくわからなくなってる僕をち

よつと気持ち悪そうな目で見た後、薫子は僕の首筋に顔を埋めた。

背中ごしに伝わる胸の感触が、さらに暴力的になつてきたというか、すごくやわらかくておもしろいきりだきしめたくなったりなくもなく、っていかばくはなにをいつているんでしょう・・・ちよつと壊れた。

ってか、胸以前に、彼女の柔らかな吐息が僕の首にかかつて、ものすごく恥ずかしい。

彼氏でもない男に、こんなことをしないで欲しいと、声を大にしていいたい。

・・・嬉しいけどさ。

「薫子さん、なんか、すごく恥ずかしいんでやめて頂けたらとても嬉しかったりするんですが」

「ふーん、私がこんなことするなんて、あんたにだけなんだから、光栄に思つて欲しいのに、なんで拒絶なんてするの？」

声から感情が抜けてるんですけど。

もう、なんていうか、絶対零度なんですけど。

ツンデレかつ！！ってつつこみもいれられないくらいに怖いんですけど！！

「すみません、なんでもないです、許してください」

「よろしい。わかればいいのよ。許してあげます」

とても上から目線でのコメント、どうもありがとございますっていうか、胸！胸があたってるってば！！

そんな風にして、僕らの休日過ぎていくのです。

これが僕の疲れている理由。

親友の五郎にばれたら殺されそうな、そんな贅沢な悩み。

それはとても、とても大切な、そんな宝物みたいな優しい時間なんだ。

そうやって僕の悩みは、降り積もる落ち葉のように積もり積もっていくのです。

．．．．いまのは、秋の落ち葉とかけてるんですよ？うまいことっているつも「つまんない！」りなんですよって、だから地の文につっこむのはやめてくださいってば。

状況説明という名の中だるみ

僕は高校生である。

名前はまだない・・・って、そんなことあるわけもなく、普通に名前があつたりする。

市井一年。

うん、普通の名前があるわけじゃないのがミソ。

なんていうか、読めないよね、これじゃ。

イチイ ヒトトセって読めます。

みんなは、ヒトさんとかひーちゃんとか、そんな風に読みますんで、みなさんはそんな感じで呼んでくださいね。

まあ、そんな僕、ヒトトセは今日も自分の通う学校にいたりする訳なのです。

聖・ザ・ビエル高校の二年生、それが僕の職業。

なんかものすごく変な名前って言うか、某聖人の名前からとってるんじゃない？っていう感じのこの学園は、名が体を表すを地でいく如く、宗教系な私立学校である。

キリスト教系ではない。

キリスト教にとっても近いけど、なんか、ご本尊らしきもんが、木製のザビエルさん。

めっさでつかい。

全長10メートルほどはあるんだよ。

しかも、座禅の状態。

そして、福福しい笑顔。

ありがたやゝありがたやゝなんまんだぶなんまんだぶって、手を合わせたくなるような。

なんかよくわからないよね、これじゃ。

でも、そんなふざけた学校であるにもかかわらず、入学の倍率はとてもたかい。

それはこの学校が、ものすごい進学率を誇る学校だったりするかなのです。

ザビエルなのに進学率県下トップ。

ザビエルなのに東大とかも入る奴がいる。

ザビエルなのに・・・いや、ザビエルでも別にいいんだけどさ。何となく、納得いかない青春的一幕なのでありました。

そして、僕はご本尊が佇む目の前にある中庭にあるベンチに腰を下ろしております。

時刻は夕刻。

赤くなつた太陽が長い影を地面に描き、なんか、とても情緒豊かな色に染め上げております。

まったりまったりしてる時間を十分に堪能していると、僕がこの場所にいる理由となつてゐる少女がゆつくりと近寄ってきた。

家でならフライングボディアタックをかましてくるのに、やけに物静かでおしとやかに、たおやかに近づいてくるのは我が幼なじみの薫子さん、そのひとである。

いま、猫かぶりの最中。

学校では品行方正で通つてゐるからねえ。

そのどSぶり（ツンデレぶり）を発揮することもなく、できる生徒会長の姿のまま、僕の前に彼女は立つた。

「またせてしまったかしら？」

「いえ、そんなことはないです、僕も今来たところですから」

いつもと違って、回りくどい会話。

よそよそしいというか、なんというか。

違和感ありまくりのこの会話にも、だいぶ慣れてきた自分がなんとなく誇らしくて、少しだけ悲しいなんて言ったら贅沢なのかな？

ちよつとしんみりした僕の頭を、目の前に立ってる少女は手を乗せてばんぽんって叩いた。

少しだけ顔を近づけて、小声で囁く。

「そんな顔しないの。私は、私なんだから」

ちよつと怒ったような、でも、なんか励ましてくれてるような、そんな声に元気をもらう。

ああ、僕は恋をしてるんだって、こんな風になったときに思い知らされるんだ。

彼女の何気ない仕草が好きだった。

彼女の笑った顔が好きだった。

彼女の心地いい声が好きだった。

彼女が彼女であることが、それだけのことが、本当に本当に嬉しくて。

そして、そんな彼女が好きで、近くにいられる自分が好きだった。

僕が僕であるための理由は、彼女だって言えるんだろう。

それは依存なのかもしれない。

それは傾倒なのかもしれないけど。

でも、たしかに、恋だった。

「では、行きましょうか」

「はい、わかりました、会長」

僕たちが奏でる恋の序曲はどんな結末を迎えるのだろうか？
僕たちが舞う恋の舞踏はどんなふう to 彩られるのだろうか？

なんとなくにやけながら、僕は彼女を追いかけるためにベンチから立ち上がった。

彼女の隣に立つために、僕はこの場所から歩き出した。

状況説明という名の中だるみ（後書き）

なんか、中途半端で終わっちゃったけど、これはこれでありかなと思っ今日この頃。

うん、まあ、ゆっくりゆっくりとね。

月光優歩

優しい月の光が、この街を包み込む。

ゆりかごのように眠りを誘い、悲しいことや幸せなことを心から取り出してくれる光。

泣きたいときに泣けるような、笑いたいときに笑えるような、そんな、単純で単純だからこそ難しいことを、少しでも手伝ってくれるこの空気感が、僕は大好きだった。

満月じゃなくて、少し欠けてるくらいがちょうどいい。
明るすぎないくらいが、ちょうどいい。

「冬の月ってのは、なんかいいよな。うん、なんか、いい」

誰も聞いてないからこそ言える、意味があるんだかないんだかわからない独り言。

それを空気に溶け込ませながら、暗くなった夜道を歩く。

学校からの帰り道。

友人とカラオケで歌い、夕飯を食べ、そして帰路を歩く。
みんなと遊んだ後の、少しだけ寂しい感じが好きだった。
それは、僕が幸せである証だから。

楽しいときがあつたあとの、ほんの少しの寂しさが、大切な絆を
思い出させてくれる。

空には月。

襟元には風。

そして、手にはあの子がくれた手袋。

自分が好きなものに囲まれる生活の、この心地よさを。

大金を手にするより、性欲に溺れるより、怠惰に生きるよりも、何倍も何倍も幸せなこのときを。

いいなつて、そんな風に思える自分を褒めてあげたくなった。

「なんか、僕って変な奴かもなあ」

「うん、変な奴だよ。今頃わかったの？」

いきなり聞こえた声に、僕は飛び上がるくらいびっくりした。つてか、実際に飛び上がった。

「な、え、ちよつ、いつからいたの??？」

「冬の月つてのは……ってしみじみとおっさんくさく言ってるくらいから」

最初からじゃんっ！っつてっつこみたいけど、っつこんだら負けのような気がするからっつこまない。

っつこんだらまけ、っつこんだらまけ、っつこ「なにいやらしいこと考えてるのよ」んだらつて、そんな意味じゃないし、そもそも地の文にコメントするの、いいかげんやめてくれますかっ！！

動揺を落ち着かせるように、何度も何度も深呼吸をした後、隣を普通に歩きやがっておられます幼なじみのお嬢様に向き直ってみた。ふわふわの毛で囲まれてるフード付きの白いコートに、膝丈のスカート。

足下にはブーツ。

うん、今日もかわいい。
なんかよくわからない確認を試みたりした後、彼女に聞いてみる。

「どしたの、こんな時間に？女の子の夜の一人歩きはだめって、この前も言っただでしょ？」

「こんな時間って、まだ十時だよ？全然遅くないじゃん」

「十時だからって、だめ。ここの道、暗いし隠れるところいっぱいあるんだから、絶対駄目。出かけたかったら僕を誘ってくれてもいいから」

「過保護」

「なんて言われても、譲れません」

「ケチ」

「ケチで結構です」

「変態」

「いや、それは違うし、そもそも心に刺さった後に爆発するくらいのダメージを与えるからやめてくれませんかっ、お嬢さまっ！！」

あまりの言いぐさに絶望してる僕に、薫子は近づく。
漫画だったらぴとって音が聞こえてきそうなくらいの距離に立つと、僕の手を握る。

「これで満足？」

やれやれ、しかたないんだからって声が聞こえてきそうな表情を浮かべながら、僕を促して歩き出す。

呆れ果てるのはいいけど、顔が真っ赤なんだけどなあ。

心の中で呟いて、僕は彼女の手をぎゅってにぎりしめた。

いじっぱりで、かわいげがなくて、でも、とても優しいこの子を、離したくなかったから。

いつまでも隣を歩けますように。

そんなことを、月に願いながら。

月光優歩（後書き）

まったりな時間が、
贅沢なんだろうね

そして僕らは恋に落ちる（前書き）

恋をしたいもんですの

そして僕は恋に落ちる

「俺たち親友だよなっ！！」

鼻息を荒くした男が、昼休みの食事中である僕にほざきやがりました。

変態である。

僕はこの男を通報しなければいけない義務感を覚えた。

そう、世界のために。

世界のために。

大事なことなので、心の中で二回言い切った僕の想いをまったく感知することもせず、自称親友である彼は僕の手を取った。

ご飯を食べるのものすごく邪魔である。

ってか、存在自体がすごく邪魔である。

いっそ、どつか別の次元の隙間に落ちて、イカみたいに頭がとがっちゃえばいいのに・・・。

どつかから電波を受信して笑みを浮かべる僕に、そいつは一步引いて逃げの体勢に入る。

ちよつとむかつくけど、どつか言ってくれるなら好都合だなあと
思った僕に対し、そんな願いをやっぱりこれっぽっちも理解しや
がない男は、再び話し出す。

「いいだろ？俺とお前の仲だろ？」

「どんな仲だかわかんない。っていうか、お前誰??」

「そっからかよ!!」

うむ、なにげにショックを受けている。

しかたないなあ・・・許してあげようかな、そろそろ。

「冗談だよ、冗談」

「ほんと、勘弁してくれよ。なにげにショックだったんだぞ、今？」

「ほんと、ごめんね、ゴロー」

「・・・ゴロー？いや、おまえ、なにいつてんだよ？俺の名前はつ「ゴロー」、どうしたんだよ？」って俺はゴローなんて名前じゃ「どうしたんだよ、ゴロー」。いつものお前らしくないよ」・・・つて、もう、ゴローでいいよ。でも、どうしてそんな名前で？」

「北の国からのお父さんに似てるから」

「まじかつ！！」

なんだかよくわからんけどショックを受け、地面に手をついて涙を流しまくってるゴローの肩をぽんと叩く。

涙目で見上げてくるゴローを気持ち悪く思いながらも、慰めるように手に力を込める僕。

ああ、優しいなあ。我ながら慈愛の固まりみたいだなあ。

なぜか「いててててててててててええええええ！！」って床を転げ回るゴローに話しかける。

「で、いきなりどしたん、ゴロー？気持ち悪いこと言い出して？」

「気持ち悪いって・・・なにげにひでえなあ、ひーちゃんはいあ、頼み事って言うか、なんていうか・・・」

「頼み事???」

「おう、何も言わずに俺に会長をくれぐふあぁっ！」

奇声を発しながら吹っ飛ぶゴロー。

そして、そのきっかけになった僕の拳。

握りしめられた拳からは、炎のオーラが見えるかのようだ。

「ふざけたこといつてんじゃねえぞ、ゴローの分際でっ!!」

無意識に叫ぶ僕の周りから、人影が消えた。

普段は穏やかな部類である僕が、いきなり叫んだからビックリしたんだろう。

でも、後悔はない。

だって、ゴローだから。

そして、ゴローだから。

自分の中に答えを出し、吹っ飛んだゴローが戻ってくるのを待つ。
うん、僕、優しいなあ。

そんな風に自己満足していると、鼻水と鼻血でわけがわからなくなったゴローがすごい勢いで飛んできた。

「何でいきなり殴るんだ、てめゝはっ!!」

「お前が変なこと言うからだろうがっ、ゴローの分際で!!!!」

怒鳴ってくるゴローに対し、それを上回る怒気をたたきつけた。
僕は怒っているんだ。

うちの猫かぶりさんに手を出すなんて、断じてゆるさんっ！

お父さん、許しませんよっ!!
がるるるるっていう威嚇が聞こえてきそうな僕に、若干ひいてるゴローが引きつった声を出す。

「そ、そんなに怒らなくなっただっていいだろ??冗談だって、冗談」

「冗談でも言っていていいことと悪いことがあるんだよっ!!」

「ほんとにひくちゃんは会長のことになると怖えんだから・・・。
いや、ほんとごめん、お願いだから睨まないで。頼みって言つのは、会長のことじゃなくてさ」

続けて言おうとしたゴローがフリーズした。

油の切れたおもちゃみたいにギギギとでもいうようなカクカクした動きになる。

ん?僕の後ろになにかいるのかな・・・??

振り返ろうとした僕の頭を、誰かの手が撫でた。

なんか、すごくなじんだ感覚で、それが誰なのか一発でわかる感じ。
じで。

「だから、子供扱いするのはやめてくださいってば、会長」

「あら、ごめんなさい。すごく撫でやすい所にあったから」

くすくすと笑う薫子に、深い深いため息をつく。

学校の時の薫子には勝てる気がしない。ほんとに才女って感じだから。

いや、二人でいるときの薫子にだって、物理的に勝てないけどさ。なんかものすごく悲しい思考に落ちていきそうになるのを必死に

食い止めていると、薫子の後ろに隠れるようにしている少女に気づいた。

「あ、千里さん、こんにちは」

「あ・・・こんにちは・・・」

消え入りそうな声で返事すると、薫子の腕にぎゅってくつつく。小動物のようなこの子は、薫子の親友の千里さん。親しい友人たちにはちゅちゃんって呼ばれてる、とてもかわいらしい女の子です。人見知りなうえに内気で、あまり人と話したり出来ないみたいだけど、それでも礼儀正しさとけなげな感じが好評で、密かにファンクラブもあるみたい。

本人は全然そんなこと知らないだろうけど。で、彼女は薫子にめっちゃくちや懐いていて、いつも一緒にいる。もう、恋してるんじゃないの???って思えるくらいの勢いで。一人っ子の薫子も、なんか妹が出来たみたいで嬉しいらしく、とてもとても面倒を見たりしてるのです。

「ち、ち、千里さん、こんにちはですっ!」

「・・・・・・こんにちは・・・」

変な敬語を交えるゴロー。それに対して返される、消え入りそうな声。

あゝ、恋な訳ですね、わかります。

あからさまに挙動不審なゴローに、がんばれのエールを込めた視線を送ってみたいするけど、まったく余裕がないゴローは全然気づ

かない。

恋は盲目・・・ってやつですな。

やれやれと思って後ろを振り返ってみると、苦笑いを浮かべた薫子の姿。

二人で顔を見合わせると、僕らはちよつとだけ笑いあった。

たくさんのお恋があつて、たくさんのお別れがあつて、でも、どちらもこの地球で生まれた小さな奇跡で。

悲しみも嬉しさも、楽しさだつてつれてくる魔法は、きっと僕らを前に進めてくれる。

押しつぶされないように、溺れないように、そして、少しでも優しくなれますように。

そんな願いを込めて、僕らは恋をするんだ。

呼吸をするように、誰かに恋をするんだ。

紡ぎあわせる言の葉（前書き）

ひさしぶりでございます。パソコンがぶっ壊れたのと、仕事が忙しくなったために更新がとどこおっております。↑いいわけ。

でも、待っていていた方がいてくれただけで、いつまでも書き続けられるような気がしております。

少しでも楽しんでもらえる物語になっていればいいなあと、そんなふうに願って。

ちよっとテンションおかしいけど、今回（；- -；）

紡ぎあわせる言の葉

カタカタカタカタという音。

タンツという小気味のいい音。

誰かのうなり声。

密室の中で、不協和音を奏でるそれらの響きが、僕の耳に突き刺さった。

修羅場。

徹夜のためにクマがとんでもないことになってる奴。

なんだかよくわからないけど、いきなり踊り出す奴。

「青春のバツキヤ〜ロオオオオオオ！」と、いきなり走り出す奴。

もう、せっぱ詰まったのを映像化したらこうなるっていう見本みたいな光景が、そこには広がっていた。

そんな僕も、その中の一人だったりするわけで。

三日後の締め切り日を前に、うなり声をあげつつキーボードを叩き続けていた。

ここは文芸部の部室である。

男と女が半々という奇跡な比率を誇るこの場所は、でも、なにげに格闘技じゃね？っていうくらいの熱気をはらんでいたりする。

文化祭が近いからだ。

文化祭といえば、文化部が花形になる日。

運動部のようにスターになれない、なんかもう、そこはかたなくじみ〜な僕たちがスポットライトを浴びてキラキラと輝ける日な訳である。

そりゃあもう、気合いの入り方が違う。

普段は物静かなあの子まで、ハッスルハッスル……な訳なのである。

だが、しかし。

しかしなのである。

それは、締め切りという名の、最強の敵と戦わねばならないことも意味していた。

あと三日。

あと三日で終わらせなければならない。

だが、無情にも物語の終わりは見えてこない。

最初はよかった。

プロットもすぐに出来、キャラクターも肉付けした。

魅力的な主人公たち。

悪の美学を行動で示す敵役。

緻密な世界観。

それは、我ながら引き込まれるほどの設定だった。

だが、しかし、ばつど。

現実是非情で無情なのである。

筆が全く進まなかった。

キーボードを打つても打つても文章が踊らない。

書いては消し、書いては消しを繰り返して、でも、それでもまだ届かない。

情けなかった。

こいつらをこの世界に生み出してやれない自分が。

たまらなく、たまらなく情けなかった。

頭の中で動きまくるこいつらを、晴れ舞台に導いてやれないなんて、書き手として最悪だと、そんなふうに落ち込む日々が続いた。

机に突っ伏し、ぐぬぬぬぬっと唸り続けている僕の周りから、音が消えた。

つい一瞬前まで地獄の怨嗟のような状態だったのに、いきなり真空状態。

ん？って疑問に思った瞬間に、頭にどすつという衝撃。

「ぐふあああああつ！」

大げさでも何でもなく、痛みของあまりイスの上から転がり落ちる。そのまま、ごろごろと転がり続ける僕は、机の脚にぶつかって止まった。

すごく痛い。

なんだこれ？？

経験したことのない程の衝撃に頭を押さえていると、僕の髪を誰かが撫でた。

涙で滲む視界越しに相手を見ると、そこには予想もしなかった・・・でも、そんな打撃を与えるという点では予想できた相手の姿が。

「大丈夫？」

すごく心配そうな声。

だけど、目が笑ってない。

「おおげさんじゃ、われえ・・・」とでも言いたげな強い光を帯びてるのを確認し、バネ仕掛けの人形のように勢いよく飛び起きる。

「だ、大丈夫でありますっ、曹長殿っ！！」

見事なまでの敬礼である。

もう、軍隊に入って二年は経過しました的な完璧さなのである。

・・・自分でも、何を言いたいのかわからなくなってきた。

「で、どうして会長がここに？」

落ち着いたと同時に、至極まともな疑問が浮かんできて、気がつけば僕は問うていた。

さっきまで鬼のような笑顔（他の人には角度的に見えてない）を浮かべていた会長・・・薫子が告げる。

「なんか、毎日毎日遅くまで起きていたみたいだから、心配になって。だんだん、顔色が変になっていくし、倒れるんじゃないかって、そう思ってた。」

僕にしか届かないように小さな、弱々しい声。

その声に、僕は笑う。

心配性な彼女と、彼女に心配を押しつけているアホな自分に対して。

「大丈夫だつてば。たかが小説書いてるだけで、倒れるわけじゃないじゃん」

「たかがじゃない！」

自嘲が浮かぶ僕の台詞を遮るように、彼女が叫ぶ。
突然のことに、僕は呆然、周りは啞然とするけど、薫子は気にしない。

気にしないで、僕の頬に手を伸ばす。

そつと、そつと、撫でていく。

「たかが、なんかじゃないよ。あなたにとって、物語を書くことがどれだけ必要なことで、大切なことなのか、わかってるから。誰よりも側で見てきたんだから、それくらいわかるよ。苦しんで、悲しんで、情けない自分を責めてるヒトトセのこと知ってる。だから、誰にもバカになんかさせない。ヒトトセ自身にだって、バカになんか、絶対絶対させてなんかあげないんだからっ！」

泣きそうな声。

もう、泣いてるのかもしれない。

自分が打ち込んでいることに対して、こんなに真剣に考えてくれる誰かがいるってことが、ほんとにありがたかった。

たかが小説で、ただの自己満足で、でも、そんなものを認めてくれる存在がいるってことが、本当に本当に嬉しくて。

僕は彼女を抱きしめた。

ああ、なんて滑稽な理由なんだろう。

なんてくだらないことで、僕らは抱き合ってるんだろう。

他の人から見たら、ただのバカにしか思えないんだろうなって思っ
て、でも、それでも嬉しくて笑った。

「薫子、ネコがかぶれてないよ？」

「いい」

「あんなに、みんなのためにつて、自分押さえてたのに」

「あんたのためだったら、別に、いい。だから、ちょっと黙って」

「了解です、お嬢様」

おどけた調子で答える僕の頬にぐりぐりと頭をすりつけると、彼女は小さくバカって呟いた。

幸せな物語を紡ぎたかった。

誰かを喜ばせることができる物語を。

文章をきらきらとした光で彩られるような、そんな物書きになりたくて、僕は小説を書き始めたんだ。

誰かの心の傷に、そっと手を当てられるような、そんな物語を紡いでいきたい。

自分がもらったのと同じような、そんなわくわくとドキドキと、少しの切なさを、バトンのように手渡せますように。

そんなふうに思ったんだ。

百人が読んでくれて、そして、その中の一人でも気にかけてくれたら、僕は本当に報われる。

そんなふうに思えるんだ。

たった一人の あなたへ。

デートをしよう！(前編)(前書き)

初の前後編。

後編で終わるのは未定w

デートをしよう！（前編）

「デートがしたい！！！」

季節は秋。

そう、うだるような暑さの中、頭がおかしくなるほどの不快感を我慢する季節ではない。

少し肌寒く感じるけど、色づいた木の葉を見るのは心地よいし、なによりもご飯がおいしくて幸せな気分になる。

そんな季節。

だから、いきなり仁王立ちになって道の真ん中で頭の痛い台詞を吐く変質者がでる季節ではないはずだ。

目の錯覚だと思いこみ、無視して学校からの帰り道を歩く僕に、変態が声をかけてくる。

「おい、何で無視するんだよ、おいつて。おいつてば！！！」

何もきこえない何も見なかった変態に知り合いなんていない、そんなことをぶつぶつ呟きながら足を速める僕の肩に、変態が手をかけた。

「放せ、変態がつ！！！」

あまりの不快感に回転を加えた拳をたたき込んだ。

腹を殴られた変態は、そのままくの字に浮き上がると、地面に崩れ落ちる。

悪は滅びた。

僕は水戸黄門の再放送を見るために家路を急いだ。

めでたしめでた「なにすんだ、このやろうつ！！！」しって、変態

が僕に怒声を放つとは、どういうことなのだろう？

世界のために、悪を滅ぼしただけなのに、なぜに僕がこんなことをいわれなくてはならないのか。

世の不条理に憤りながら、その変質者の方に視線を向ける。

「ひいつ」

酷くおびえた表情で、情けない声を上げる変態に首をかしげる。何をおびえているのだろう？ なんで後ずさっているのだろう？

よくわからないままだったけど、解放してくれるなら願ったり叶ったり。

足早に通り過ぎようとした僕の肩に、再び手がかかる。かすかに震える手で、必死にわしづかみだった。

「ご、ごめん、なんだかよくわからないけど、そんなにすごい顔で睨まなくてもいいじゃんか。俺が悪かったから、話を聞いてくれよ」

聞き覚えのある声に相手の顔をよ〜く見てみると、それはゴロ―だった。

「ゴロ―だったのか・・・」

「はっ？ あんなに凝視してたのに、ぜんぜんきづいてなかった・・・なんてことはないよ・・・な？」

「うん、きづかなかった。だって、僕は変質者と知り合いになった覚えはなかったし、意識から自然にはずれちゃったんだろうな」

「まじか・・・まじでいつてんのか・・・？」

「うん」

至極当然のように頷く僕にがつくりと肩を落とし、地面を殴り出すゴロー。

もう、なんか、ほんとに変質者に見える。

「じゃあ、そういうことで、僕は帰るよ」

返事を待たずに、さらに家路を急ごうとする僕に、変質者・・・じゃなくて、ゴローがあわてた声を出す。

「いや、ちょっと待ってってくれって。ひーちゃんにお願いがあるんだ!」

「またふざけたことだったら、殴るよ?」

「ふざけてなんかないさっ!!俺は、デートがしたいだけなんだからなっ!」

奴が言い終わる前に、僕の拳が頬にめり込んだ。
宙を舞うゴローの体。

そう、まるで某コスモを操る聖闘士なみのふつとびかたで、彼の体は空を飛ぶ。

でも、大丈夫。

なぜならば、彼はギャグキャラだから。

怪我すらない宿命の元に生まれているのである。

「僕とデートなんて・・・ほんとに、ゴローって変態だったんだ・・・」

ショックで呆然と呟く僕に、復活したゴローが走り寄って懸命にいいわけをはじめめる。

「ち、ちがうつ！そうじゃなくて、俺は千里さんとデートしたいんだっ！！」

力説しすぎて怖いくらいのゴローの勢いに押されつつ、詳しく話を聞いてみると、こういうことだった。

曰わく、ゴローは千里さんが好き。

曰わく、自分で誘うのはおびえさせちゃうし、そもそも話す前に逃げられてしまいそう。

曰わく、千里さんと仲がいい、薫子に仲介を頼みたい。

曰わく、薫子と仲がいい僕に、それとなく頼んで欲しい。

以上の理由から、道ばたで叫んでいたらしい。

……道ばたで叫ぶ理由が全くわからない気がする。

まあ、ゴローだから。そんな理由で無理矢理納得すると、僕は考え、薫子と相談するから期待しないで待ってるがよいと捨てぜりふを残してゴローから離れた。

いいかげん、水戸黄門が見たかったし。

その夜、僕の部屋にはベッドの上でごろごろしている薫子さんの姿があった。

いままで説明してなかったけど、僕と薫子は家が隣同士で、いわゆる幼なじみという奴だった。

しかも、じいちゃん同士が親友で好敵手。

父ちゃんたちも、同級生だった僕と薫子の母親の二人をゲットす

るために作戦を練った仲で。

そんな僕たちが仲良くなるのは、もう、当然だったりする。

本人たちの意志は度外視して、両親たちは僕らを夫婦みたいな扱いしてるし。

まあ、薫子を好きな僕としては、うざったさ半分、ありがたさ半分だったりするんだけどね。

「で、結局、ダブルデートしようってこと？」

寒いときにこそアイス！！という持論を展開している薫子がお気に入りのハーゲンダッツ抹茶味を食べながら僕に聞いた。

うつぶせになりつつ足をばたばたさせるという、行儀は決してよくないかつこでも、とてもかわいく見える。

カワイイは正義！！

カワイイは正義ですよ！！

自分を見失って心の中で二回叫んでいた僕に、彼女は再び声をかける。

「こらこら、声にでてるわよ。嬉しいからいいけど、ちゃんと質問に答えるように」

にやにやしてる薫子の顔が、なんか小悪魔みたいでドキドキした。そんなことを思ってることを全然隠すつもりもなかったけど、話が進まないで彼女に言葉を返す。

「ゴローとしてはそうしたいらしいんだけど・・・問題は千里さんなんだよね。あんなに恥ずかしがり屋な子が、ゴローの相手してくれるかどうか」

「そうねえ・・・私が頼めばたぶん大丈夫だと思うけど。それ以

前に私があの子のいやがることしたくないんだけど。ゴロー君がいい人なのかどうかっていうのが、いまいちよくわからないし」

眉間に寄せた薫子のしわを指でぐりぐりもみほぐしながら、僕は彼女にいう。

「ん、ゴロー自体はだいじょぶだよ。アホでバカで変態だけど、人が傷つくことはしないやつだと思う。それは保証するよ」

「そつか。・・・ヒトトセが信頼してるんだったら、私はそれを信じるよ。私としても、千里には幸せになって欲しいし、いい人がいるならあの子を支えてほしいって、そうおもうし」

「そだね。お互いに幸せになってくれればいいなって、そう思うよ」

しみじみと呟いた僕に、ふんって返した薫子は、にやにやした表情で口を開く。

「私たちみたいに？」

「そう、僕たちみたいに幸せになってくれればいいなって、そう思う」

からかおうと思って逆に顔を真っ赤にさせた薫子の頭をぽんぽんって叩きながら、僕は彼女が食べていたアイスを自分の口につっこんだ。

そして、デートは次の日曜日に決まったのでありました。
とぅーびーこんていにゅーど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4654y/>

ぼよぼよ日和

2011年12月1日23時51分発行